

## Contents

産総研つくばセンター

平成 20 年度一般公開報告

■地質標本館特別展「地球の記憶を掘り起こせ！深海掘削がさぐる地球の不思議 - IODP 普及キャンペーン」と関連イベント

■キッチン火山学で噴火体験

中国山東省国土測院来所

石油技術協会春季講演会シンポジウム「現在、気になる探鉱技術とその適用例 - イメージングとマッピング -」に参加して

第 2 回 GEO Grid 連携会議報告

海洋基本法制定一周年記念シンポジウムに参加して

紹介ビデオ「地質調査総合センター」について

秋田情報展のプレイベントを開催

新人紹介

スケジュール

編集後記

## 地質情報展 2008 あきた

日時：2008 年 9 月 19 日～21 日

会場：秋田市民プラザ ALVE きらめき広場

URL：[http://www.gsj.jp/Info/event/2008/johoten\\_2008/index.html](http://www.gsj.jp/Info/event/2008/johoten_2008/index.html)

## 産総研つくばセンター平成 20 年度一般公開報告

2008 年 7 月 26 日（土）、産総研つくばセンターの一般公開が開催されました。天候にも恵まれ、過去最高の 5,877 名の来場者を記録しました。地質調査総合センターも多くのブース出展や講演を行いました。その中の一部を紹介します。

### ■地質標本館特別展「地球の記憶を掘り起こせ！深海掘削がさぐる地球の不思議 - IODP 普及キャンペーン -」と関連イベント

澤田 結基（地質標本館）、目代 邦康（自然保護助成基金）※、  
青木 正博（地質標本館）

地質標本館では、産総研一般公開日の 7 月 26 日より、（独）海洋研究開発機構（JAMSTEC）、日本地球科学掘削コンソーシアム（J-DESC）、筑波大学院生命環境科学研究科との共催による夏の特別展「地球の記憶を掘り起こせ！深海掘削がさぐる地球の不思議 - IODP 普及キャンペーン -」が始まりました。IODP は統合国際深海掘削計画の略称で、日本主導で進められている国際研究プロジェクトです。

この特別展では、これまでジョイデス・レゾリューション号などに乗船して IODP、ODP（国際深海掘削計画）の研究を行ってきた産総研と筑波大学の研究者による研究紹介パネルを 12 編展示しています。これらのパネルは、サブテーマ「海洋地殻とプレートテクトニクス」と「地球史と気候変動」にわかれて展示され、マントル物質の掘削やメタンハイドレートの分析、古気候復元に至るまで、海洋コアを用いた様々な研究テーマが紹介されています。また、海洋研究開発機構からは、地球深部探査船「ちきゅう」の 1/300 模型や紹介ビデオ、「ちきゅう」の試験航海で採取された下北半島沖のコアサンプルをお借りしています。一般公開日には、多くの方がこれらの展示を興味深くご覧になっていました。

7 月 26 日の産総研一般公開日には、特別展に関連したイベントを行いました。地質標本館特別講演、子ども向け講演と「ちきゅう」クイズ大会です。地質標本館特別講演は共用講堂・大会議室で行われ、筑波大学の小川勇二郎教授に、「プレートの沈み込みでできた日本列島 - 深海掘削と潜水船調査でわかったこと -」というタイトルでお話いただきました。日本列島をつくる付加体がプレートの沈み込みでつくられることを、ブルドーザーやエスカレーターのビデオを交えながら、わかりやすく紹介していただきました。定員 140 名の会場は 143 名の聴衆で埋まり、鋭い質問も飛び出すなど、語り手と聞き手の熱気があふれる講演となりました。

子ども向け講演とクイズ大会は地質標本館の映像室で行われ、海洋研究開発

機構広報部の長谷部喜八さんによって、深海掘削や掘削船「ちきゅう」のことがわかりやすく解説されました。長谷部さんの柔らかい語り口による解説は、子どもだけでなく保護者の気持ちもしっかりとつかんでいたようです。講演に続くクイズ大会では、「ちきゅう」に関するクイズが10問出題されました。問題のなかには、「牛久大仏と「ちきゅう」のどちらが高い？」など茨城県を意識した問題もあり、大いに盛り上がりました。

ところで、今回の展示は、日本地球科学掘削コンソーシアムと海洋研究開発機構が主催する「IODP 大学&科学館キャンペーン」の一環として行なわれています。このキャンペーンは、統合国際深海掘削計画（IODP）を大学生・大学院生に紹介して将来のIODPを支える人材育成を目指すとともに、その研究活動を一般へ広く紹介することを目的

としており、これまでに全国21箇所で開催されています。つくばは広島に続き、22番目の開催地です。このうち地質標本館の特別展は、一般向けプログラムに位置づけられています。また、大学生・大学院生向けプログラムは、筑波大学で9月5日に行われる予定です。地質標本館では、これまでも他の研究機関と協力して企画展を行うことがありましたが、今回の特別展ほど多くの機関と協力して行う展示は、初めての試みとなります。

IODPのような巨大プロジェクトは、多くの大学・研究機関の協力によって運営されています。このような巨大プロジェクトのアウトリーチ活動は、複数の研究機関が協力して足りないところを補い合うことで、より普及効果の高い活動が展開できると感じました。

※2008年2月までの所属：地質標本館

写真1 熱弁をふるう小川勇二郎先生。  
 写真2 地質標本館特別講演の会場は満員でした。  
 写真3 クイズ大会は大盛況でした。  
 写真4 一般公開当日は、多くの親子連れがいっぱいいました。



## ■キッチン火山学で噴火体験

高田 亮・宝田 晋治・古川 竜太・及川 輝樹・下司 信夫（地質情報研究部門）

地質標本館前の広場にあるスロープが前から気になっていました。スケボアの遊び場とも思えない？横からみると火山の裾野にそっくりです。今回の一般公開で、このスロープを使って火山の流れもの実験を行うこととしました。2005年から、毎年、少しずつ話題を変えて行ってきました。一般公開での火山噴火の体験実験です。これまでは各“タレント”が、日頃の“料理”の腕を競い合い、屋台風のお店を出店しましたが、今回は仕掛けの規模が大きくなったため、話題を火砕流一本に絞ってやってみようということになりました。

このような体験実験は、火山を知るには重要です。火山の原因であるマグマは見えないし、噴火は危険ですし、その規模も大きいです。そこで、身のまわりの材料で、全体を縮小して、子供に火山の仕組みを安全な実験で体験してもらうことにしました。ブラックボックスの要素が多い数値計算と違い、アナログ実験は、サイエンスの基礎を含んでおり、理科教育の宝庫です。

テーマでは「キッチン実験」と名乗っていますが、今回はキッチンの規模を超えてしまいました。事前に例のスロープで試してみましたが、迫力が出ません。メンバーで

話し合い、やぐらを組んで斜面をのぼすことにしました。とても「キッチン火山学」にはみえません。「ガーデン火山学」と言ったところでした。実験材料もホームセンターで購入しているので、なおさら、食材からは離れてしまいました。しかし、考えてみると、砂などは、世界中どこでも入手できる素材です。発展途上国にいれば食材など遊びには使えません。プロの間では、火砕流の実験は水中で行うのが一般的です。しかし、本実験は空中の斜面で行う新鮮さがありました。水中では細粒の粒子の煙にさえぎられて見えなくなってしまう火砕流中の粗い粒子の挙動が、空中でなら観察できる利点があるからです。

本番では、1時間おきに実験を行いました。はじめに宝田が工事現場の作業員の衣装で登場し、火砕流とは何かをビデオで説明しました。火砕流を知っている人は半数以下でした。それもそのはず、火砕流ということばがテレビを騒がせたのは1990年代前半の雲仙の噴火の頃でした。あれから、15年以上がたち、今の小学生が知っているはずもないのです。実験では、まず最初にビーカーにいた砂を流す小規模な“火砕流”で到達距離を見てもらいました。それをもとにバケツによる砂の大規模“火砕流”本体が止まる位置を予想してもらい、おもちゃを置いてもらいました。笛の合図で、斜面の上から、バケツの砂をまくと、地質標本館に向かって“火砕流”が流れてきて、斜面上部のおもちゃを巻き込みました(写真1)。最前列の子供達はゴーグルをかけてもらいました。“火砕流”本体から飛び出してくる小石や舞い上がる灰には臨場感がありました(写真2)。火砕流を知らない子供達に「本当の火砕流からでてくる小石や灰でも400℃以上の温度がある」との宝田の必死の解説が通じたでしょうか。舞い上がる灰が納まった後、子供達と一緒に「白い軽石は上にあるね」と火

砕流堆積物の観察をしました(写真3)。実験終了後、伊豆大島、雲仙、樽前などの岩石をおみやげとして配布しました。“火砕流”が停止する場所を予想した子にはピタシ賞として、火山弾の賞品ができました。実験後に、食いついてくる子がいろいろな追加の実験を行いました。

最後となりましたが、鉄パイプのやぐらの組み立てでは、広報部の谷田部氏には大変お世話になりました。地質情報研究部門の染谷さんには実験後の後かたづけも手伝っていただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。



写真1  
斜面の上からバケツの砂をまいた“火砕流”が流れ下る様子。



写真2  
砂の“火砕流”が停止して、灰が舞い上がり、小石がそこから飛び出している様子。



写真3  
子供達との“火砕流”堆積物の観察。

## 中国山東省国土測繪院来所

内田 洋平・田口 雄作(地圏資源環境研究部門)

2008年6月17日に、中国山東省国土測繪院から副院長の張慶(Zhang Qing)氏以下6名が来所されました。山東省国土測繪院は、山東省国土資源庁の直属事業単位であり、国家測繪局から最初に認定された甲種測量資格を有し、測量情報技術関連業務を行う国家機関です。航空測量データの取得から、現場計測、データ処理、リモートセンシング、地理情報システム(GIS)の開発および応用まで、測量情報技術全般において一貫した業務を行っています。分かりやすく言えば、山東省の国土地理院に相当する機関

です。現在の総技術者数は450名で、そのうち48名が上級国家資格、142名が中級国家資格を取得しています。

同院の一行は、わが国の関連機関との業務提携を強く望んでおり、去る6月18日から20日まで、パシフィコ横浜で開催された「地理空間情報フォーラム2008」に、同院の業務内容を展示紹介するために来日しました。この訪日機会を利用して、地質分野でのGIS応用研究の情報収集と、今後の交流のため、6月20日に地質調査総合センターを表敬訪問されました。

まず、地質調査情報センターの脇田センター長から、来日歓迎の挨拶と本所の簡単な紹介がありました。引き続き、地質情報統合化推進室の阪口室長と宝田氏から、GSJにおける数値地質情報や衛星情報に関する研究の説明がありました。地質情報統合化推進室では、数値地質情報のデータベース構築を進め、ウェブ・データベースやウェブGISなどの技術を用いて、理解・活用しやすい形にして地質情報を社会に提供していること、そのために、現在公開中の総合地質情報データベース（GEO-DB）の整備を推進中であることを説明しました。そのほか、統合地質図データベース（GeoMapDB）やウェブマップサービス、100万分の1世界地質図（OneGeology）の紹介もありました。山東省国土測絵院は、地図情報の数値化や地理情報システムの開発も実施しているため、活発な質疑応答が行われました。

その後、加藤地質調査総合センター代表の部屋へ移動し、加藤代表から歓迎の挨拶と、東アジア地質災害図および東・東南アジア地質災害デジタルマップの説明がありました。本デジタルマップに納められた地質災害のデータは、

1994年から1998年まで実施した「東アジア自然災害マッピングプロジェクト」を通じて、アジア各国の地質調査関連機関によって収集されたものです。

今回の山東省国土測絵院との会談を通して、これまでの地質調査総合センターと中国との研究協力体制を軸として、今後は両機関における研究協力が期待されます。

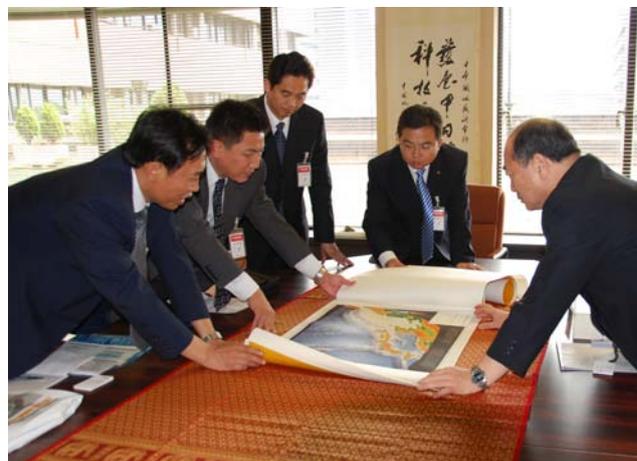


写真 加藤代表から東アジア地質災害図の説明を聞く訪問団

## 石油技術協会春季講演会シンポジウム「現在、気になる探鉱技術とその適用例 —イメージングとマッピング—」に参加して

森田 澄人（地質調査情報センター）

2008年6月10日から12日までの3日間、平成20年度石油技術協会春季講演会が新潟市の朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで開催されました。本講演会では例年、地質・探鉱、作井および開発・生産の各部門でそれぞれシンポジウムを開いており、今年度の地質・探鉱部門シンポジウムは6月11日に開催され、近年目覚しく技術開発が進んでいる探鉱フィールドのイメージングとマッピングがテーマに掲げられました。

探鉱技術におけるイメージングやマッピングとは、地質構造や貯留層および炭化水素の空間的な分布を、私たちの目で見て分かるように表現するもので、このような可視化技術の発展は石油探鉱の世界では極めて重要なテーマです。百聞は一見にしかずと言いますが、視覚に訴えることで物事の理解は最も容易になり、同時に共同作業者の間においてもその理解を最も共有しやすくなります。これは探鉱、掘削、開発という各々アップストリームの異なる担い手同士間における共通認識にもつながり、総合的な作業とコストの効率化においても大きな効果が期待されます。当シンポジウムでは、主に高精度三次元地震探査を中心として、近年のデータ取得・処理・解析技術に関わる様々な研究例が紹介されました。

まず三次元地震探査では、多方向からの信号を利用するため二次元探査に比べターゲットの位置をより正確に求められます。さらに三次元PSDM（重合前深度マイグレーション）処理を適用することで、より高いS/N比の獲得と位置精度の向上が期待できます。堆積学的観点でSeismic geomorphology（サイスミック地形学）を適用すれば、堆積環境の変遷を明らかにした上で詳細な貯留層分布が特定されます。また、近年の地震探査記録の解析は、波形から物理特性を利用することにより構造解析のみでなく地層内の物性解析へ展開していることが大きな特徴です。速度異方性による広域応力場やフラクチャー分布の推定、また貯留層内における油ガス胚胎の評価などに広く利用されています。

三次元探査を時間経過に沿って繰り返す4D探査技術は、生産過程における貯留層の状況変化の把握を可能にし、より効率的な生産に貢献することが期待できます。また、海洋電磁探査は過去10年において目覚しく進歩を遂げており、制御電流源を用いるCSEM法は油ガス層の直接検出法として近年注目されています。

これらはシンポジウムで紹介された技術例の一部ですが、現在は探鉱対象の複雑化により、地下の可視化技術へ

の要請も変化しており、さらなる精度の向上が求められるようになっていきます。どの講演においても参加者からの活

発な議論がなされ、地下の地質構造と性状の可視化技術が業界内でたいへん関心の高いことが分かりました。

## 第2回 GEO Grid 連携会議報告

牧野 雅彦・飯村 一清（地質調査情報センター）

2008年6月26日、産総研秋葉原サイト（秋葉原ダイビル11階大会議室1101室）にて第2回 GEO Grid 連携会議が開催されました（写真）。本連携会議は、産総研の融合研究課題である“GEO Grid”プロジェクトを進めるにあたり、関係各機関の有識者が一堂に会し、GEO Grid 推進に関する助言、産総研をハブとした連携の促進、GEO Grid に関わる研究者の保有するデータ・リソースに関する議論等を行う場として設定されたものです。文部科学省海洋地球課、経済産業省知的基盤課・航空機武器宇宙産業課等の関係省庁のオブザーバー参加も含め、総勢30名の出席がありました。

開会の挨拶は議長を務める佃研究コーディネータが行いました。今回の会議は、1年ぶりに開催されたため、交代や所属変更を含めた議員・オブザーバーの紹介がありました。

議題に入り、まず「GEO Grid の概要」では、関口議員（情報技術研究部門長）が GEO Grid ツールおよび GIS 関連ツール研究開発を紹介し、脇田地質調査情報センター長がこの1年間の経緯と今後の予定について概要説明を行いました。次いで情報技術研究部門・土田グループ長が、連携会議分科会および幹事会の活動について報告しました。

「国内連携事項」では、衛星情報について情報技術研究部門・松岡主任研究員、GIS 関連では地質調査情報セン

ター・阪口室長、センサーネットについては情報技術研究部門・中村研究員からヒートアイランドを例にして説明がありました。「海外連携事項」では情報技術研究部門・岩男研究員が、GEOSS、I\*Y、OneGeology、CCOP や国際標準普及利用推進などについて報告しました。

この後で意見交換に移り、各議員からは熱心に意見や質問が出されました。特に、Virtual Organization(VO) について深く掘り下げた意見交換がありました。

最後に、佃議長から、議員の皆さんから出された意見を整理して GEO Grid の連携活動を進めていきたいとの表明があり、第2回の連携会議は終了しました。



写真 第2回 GEO Grid 連携会議の様子。

## 海洋基本法制定一周年記念シンポジウムに参加して

森田 澄人（地質調査情報センター）

昨年7月に制定された海洋基本法の一周年を記念して、2008年6月27日海洋技術フォーラムの主催により、シンポジウム「海洋新時代における海洋新産業の振興に向けて」が東京大学安田講堂で開催されました。共催に東京大学海洋アライアンス、後援として海洋政策研究財団の参加でした。今年3月には海洋基本計画が閣議決定され、海洋立国としての新時代が幕を開けたばかりの向暑のこの日、祝賀ムードの中でシンポジウムは進められました。

シンポジウムは、海洋技術フォーラム代表 湯原哲夫氏の開会挨拶に始まり、続いて来賓挨拶、講演、パネルディ

スカッションが行われました。基調講演を行った前原誠司代議士は、国を挙げて海洋開発を進めることは政治の責務であると述べられました。

東京大学海洋アライアンス機構長の浦環教授は、海というなかなか理解されない（してもらえない）分野における研究・教育へのファンディングに特別な配慮が必要であると訴えられました。自らが携わっている、近年人気のロボット産業を引き合いに出し、日本一となった九州大学のサッカーロボットと比べ、海洋調査ロボットを開発・製造するには桁違いの予算が必要となることを示されました。

各講演ではもちろん、最後に開かれたパネルディスカッションにおいても資源利用に関する意見がたいへん多く発表されました。メタンハイドレートやマンガン団塊および海底熱水鉱床については既に調査がかなり進められていることから、開発への道が遠くないことを指摘され、また水産物についても直面した問題は明らかであり、いずれにしても国家的な方針の転換と大規模な投資により解決される可能性が高いことが指摘されていました。特に、今年カナダで生産テストに成功したメタンハイドレートの資源開発については、幾人もの講演者が日本周辺海域での開発の重要性を強調されました。

いずれの見解におきましても、今後日本が海洋立国として着実に進化していくためには、国が明確な方針を早期に打ち出して積極的な投資を行うこと、そして産業を展開していくためには民間の早期参入が大事であり、また人材育成により一層の力を入れるべきとの意見が挙げられまし

た。シンポジウムを傍聴した側としましては、意外にも、産、学、官および政の方向性はかなり一致しているという印象を受けました。すなわち、国政が今後どれだけ海洋に力を注ぐかにかかっているともいえます。今後の展開に大いに期待したいと考えます。



写真 開会の挨拶をする湯原哲夫海洋技術フォーラム代表

## 紹介ビデオ「地質調査総合センター」について

内田 洋平（地質調査情報センター、現：地圏資源環境研究部門）

これまで、地質調査総合センターを紹介するビデオは、地質調査所時代のビデオ（1996年制作、22分）と、AISTの紹介ビデオの一部分（約1分）の2種類でした。地質調査所時代のビデオは日本語版のみで、国際学会におけるGSJブースでの放映や、海外からの来訪者に対して現在のGSJを紹介・説明するには不便な状況でした。また、紹介している内容や映像も時代を感じさせる古い物でした。

この状況を改善すべく地質調査総合センターの紹介ビデオを新規に制作することが、昨年末に地質調査情報センターで決定されました。

新規ビデオの特徴は、

- ・一般の人を対象とし、GSJの役割・位置付けや、中心的な研究業務を知ってもらう
- ・GSJは、設立当初から地球科学の基礎研究を中心に実施、ということを確認に記す
- ・6章構成で、単独に映写が可能
- ・日本語版と英語版の2種類を制作
- ・内容構成は、地質調査総合センターの戦略目標（図1）に従う

などが挙げられます。GSJとしての組織の説明は第1章のみで、その他の5章については、現在行われている代表的な研究をGSJの戦略目標にしたがって紹介しています。また、各章が独立している形式ですので、内容の修正やバー

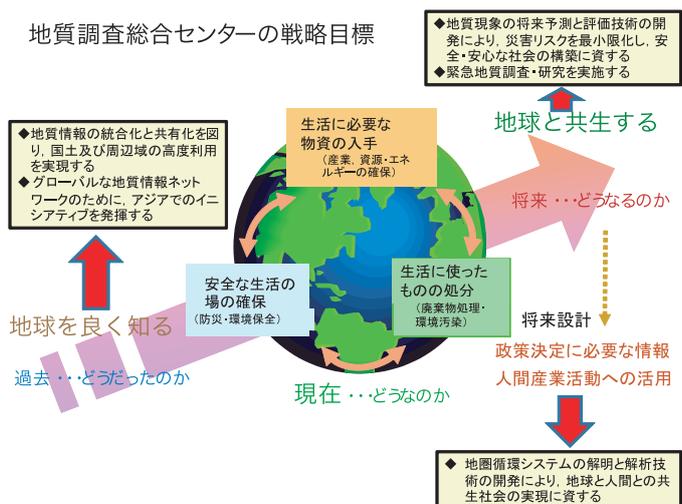


図1. 地質調査総合センターの戦略目標

ジョンアップが容易にできる、という利点があります。

実際の制作については、各研究ユニットの代表者からなる「GSJビデオ制作委員会」を今年の1月に立ち上げ、ビデオの詳細な内容構成を決定しました（表1）。引き続き、各ユニット内でコンテンツ制作担当者を決め、4月から映像素材の制作が始まりました。その後、3回の試写と修正を行い、7月に日本語・英語のナレーションとBGMの収録を経て、完成に至りました。なお、本ビデオの英語版は、ノルウェーの首都オスロで開催された第33回IGCのGSJブースで放映されました。

本ビデオを収録してある DVD は、地質調査企画室と地質標本館に日本語版と英語版が 3 枚ずつ保管されておりますので、必要な方は御利用ください。また、画像サイズを小さくして、地質調査総合センターのホームページで公開することも計画しています。

最後になりしたが、本ビデオの制作に当たり、たいへん多くの方々に御協力を頂き、実質 3 ヶ月という短い期間で完成することができました。ここに、厚く御礼を申し上げます。

表 1 紹介ビデオの構成

項目名	内容 紹介コンテンツ	制作担当	ユニット担当
Chapter 1 地質調査総合センター	1. イントロダクション 2. 地質調査総合センター 設立の背景・目的 調査所から総合センターへ 3. 研究基盤情報・公共サービス a) 地質標本館 b) 地質図ライブラリー	下司 下川・中澤・川畑 // // 吉田 中澤 都子	内田 (企画室) 内田 (企画室)  吉田 (標本館) 中澤 (情報センター)
Chapter 2 地球をよく知る その 1. 地質情報の統合化と共有	1. 成果の公表、高度利活用 a) 各種図幅 b) シームレス地質図 c) 地質情報の公開 2. 地質調査・地質図作成 a) 陸上の地質調査 b) 沿岸・都市域調査 c) 海洋調査 (沖縄) d) 海洋調査 (珊瑚礁)	下司 宝田 宝田・阪口  斉藤 小松原純子 井上 鈴木・田中	内田 (企画室)  桑原 (地質情報)
Chapter 3 地球をよく知る その 2. グローバルな地質情報ネットワーク構築	1. 共同研究 アフリカにおける鉱物資源調査 (レアメタル) 2. アジアでの協力 CCOP, APEC 研修	渡辺 内田	柳澤 (地図資源) 内田 (企画室)
Chapter 4 地球と共生する その 1. 安全・安心な社会の構築	1. 地震・津波の調査・研究 活断層調査 古津波調査 地震動・被害の予測研究 地震地下水 2. 活火山調査 火山地質図など	金田 藤原 吉見 小泉  中野	金田 (活断層)  桑原 (地質情報) 桑原 (地質情報)
Chapter 5 地球と共生する その 2. 緊急地質調査・研究	緊急調査 能登半島・中越沖・パキスタンの緊急現地調査 インド洋津波 ソロモン津波 火山	金田 穴倉 行谷 藤原	金田 (活断層)  桑原 (地質情報)
Chapter 6 地球と共生する その 3. 人間・産業活動への活用	1. 地下水 地下水循環 非常に古い地下水の年代測定 2. 土壌汚染 3. 資源エネルギー 地熱資源、地中熱 メタンハイドレート 4. CO <sub>2</sub> 地層貯留	町田 風早・森川 川辺 (西サイト)  村岡・安川 森田 柳澤	柳澤 (地図資源) 宮城 (深部コア) 柳澤 (地図資源) // // //

## 秋田情報展のプレイベントを開催

藤原 智晴 (地質調査情報センター)

2008 年 8 月 2 日～3 日秋田市の自然科学学習館のワークショップスペースをお借りして「地質情報展 2008 あきた」のプレイベントを開催しました。

夏休み期間中で、さらに竿燈祭り直前ということもあり、プレイベントも多く家族連れで賑わいました (写真)。会場には、「情報展の宣伝コーナー」「展示と解説のコーナー」「体験コーナー」を設けて情報展の一部を体験していただきました。一通りの展示を見ていただいた後に 9 月の本展の説明をすると、「是非また来たい」といった声が多く聞かれました。



写真 会場の様子

## 新人紹介

松岡 昌志

(まつおか まさし, 情報技術研究部門)

4月1日付で情報技術研究部門に主任研究員として採用された松岡昌志です。防災科研での勤務後、昨年度の1年間はグリッド研究センターにて仕事をしていたので、以前から地質分野の方々と協働させていただき、また、採用に際しても大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。私の研究分野は阪神・淡路大震災を契機に大きくは2つに分けられ、震災前は強震観測や微動計測、記録解析に基づく表層地盤の増幅特性の評価、そして、地質・地形分類に基づくサイスミックマイクロゾーニングに関する地



震工学的な研究をしていましたが、震災後は航空機や人工衛星からの画像を活用した災害情報収集に関するリモートセンシング研究に軸足を置いています。災害軽減のためには広範な知識や技術、多分野の専門家との協働の必要性を認識したからです。そのような経緯があり、現在、情報技術研究部門にてGEO Gridプロジェクトに携わっております。今後、地質・地盤、活断層、衛星情報などの基盤データを活用した地震ハザード・リスク評価を基礎としたリスクコミュニケーション研究にも取り組んでいこうと考えています。地質分野のみならずどうぞよろしくお願い致します。

## スケジュール

7月26日~9月28日

地質標本館 夏の特別展「地球の記憶を掘り起こせ! 深海掘削がさぐる地球の不思議」  
[http://www.gsj.jp/Muse/eve\\_care/2008/IODP/IODP.html](http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2008/IODP/IODP.html)

8月29日~9月1日

6th International Conference on Asian Marine Geology  
(第6回国際アジア海洋地質学会議)(高知工科大学)  
[http://www.aist.go.jp/aist\\_j/event/ev2008/ev20080829/ev20080829.html](http://www.aist.go.jp/aist_j/event/ev2008/ev20080829/ev20080829.html)  
<http://ofgs.ori.u-tokyo.ac.jp/ICAMG6/>

9月19~21日

地質情報展 2008 あきた(秋田市民プラザ ALVE きらめき広場)(地質調査総合センター、他)  
[http://www.gsj.jp/Info/event/2008/johoten\\_2008/index.html](http://www.gsj.jp/Info/event/2008/johoten_2008/index.html)

9月20~22日

日本地質学会 2008 秋田大会  
<http://www.geosociety.jp/science/content0014.html>

10月7~9日

水文学的・地球化学的手法による地震予知研究についての第7回日台国際ワークショップ  
(つくば中央第7事業所第2会議室・他)(地質調査総合センター、成功大学防災研究センター)

10月20~21日

産総研オープンラボ  
<http://www.aist-openlab.jp/>

## 編集後記

藤原 智晴

(地質調査情報センター)

恒例になった産総研つくばセンターの一般公開が今年も開催され、地質分野からもこのニュースレターでは紹介しきれないほど多くの出展がありました。心配されていた雨もほとんど降らずにとても賑わっていました。

一般公開が盛況のうちに終了したのも束の間、9月にはGSJの一大イベント「地質情報展 2008 あきた」が開催されます。多くの子供達に地質の「?」や「!」に触れて楽しんで興味を持ってもらえればと思います。

まずはこの猛暑・ゲリラ豪雨・ガンソリン高騰の夏を乗り切らなければ・・・

## GSJ Newsletter No.47 2008/8

発行日: 2008年8月25日

発行: 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター

編集: 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査情報センター

脇田 浩二(編集長)

藤原 智晴(編集担当)

伊藤 伸子(デザイン・レイアウト)

GSJ ニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

■地質調査総合センターホームページ: <http://www.gsj.jp/>

■GSJ Newsletter のページ: <http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7  
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672